

名という小さな学校ですが、子供たちはのびのびと育ち、とても素朴です。平成元年度から三年度まで、青少年赤十字活動研究推進校に委嘱され「環境を考える——みんなのために気づき、考え、行動する児童の育成」をテーマに実践する教育を、家庭という側面から見てきました。また、PTAの学習会や婦人会の活動で、環境について話を聞いたり考えたりしています。現在、牛乳パックによるはがき作りや廃油を利用した石鹸作り、空き缶を利用したリサイクルなどの活動をやっています。

牛島 昭和六十二年から熊本市立託麻原小学校に勤めています。牛島です。私どもの学校は、環境教育の中でも緑化学習を実践しています。教室で自然の仕組み、緑の仕組みを学習する「緑化学習」と、草花を育てたり観察したりする手づくりの「栽培・製作活動」。もう一つは、鳥の巣箱や給し台を作って学校に鳥を呼んだり、野鳥の観察をしたりする「愛鳥活動」。この三つの柱を、一年生から六年生までの発達段階に応じて授業の中に取り入れています。また、休み時間にもそういう活動があり、自然保護を体で覚えてもらおうということを実践しているわけです。私は五年生を担任しています。



米村さんをはじめ、会のメンバーが井芹川のゴミを集め、ひきあげる。水を含んだ重いゴミはしばらく置いて乾燥させ、焼却する。

## 小学校から段階的に学びたい環境

牛島 今、なぜ環境教育が必要なのかというのを、学校の先生である牛島さんが一番実感してらっしゃるんじゃないかと思いますが、いかがですか。

牛島 今の学校に赴任してまず驚いたことは、子供たちが鳥や草木の名前をよく知っているということです。しかし、一般的にはやはり自然の中で遊ぶということが少なくなっています。だから、まず自然に親しんで、知識としてばかりでなく、身近なことから自分たちで実践をしていくことが大切だと思います。

この前の台風の時のことですが、台風前には学校の木に十何個巣がかかっていたんです。そして台風の後に見に行くと五つほど残っていました。台風で倒れなかった木には巣がきちんと残っているわけです。瓦も飛んだ、看板も飛んだといった中で、子供たちは「巣はすばらしい。鳥は子育てのために相当苦労して巣を作っているんだなあ。それなら自分たちも鳥のためにやることはないかな」と感じたようです。また、最近の鳥は巣づくりにビニールテープを使ったりするんですが、それにヒヨドリが足をからませて落ちたりするのを見ると、自分たちが無造作にお菓子の紙など捨ててはいけないというようなことがつくづくわかってくるようです。

教育長 やはり小さい時に、物をきちんと片づけるとか、正しい場所に捨てるとか、そういった行動を習慣づける教育が必要



授業で生徒と鉢の植えかえをする牛島さん

要だろうと思いますね。そして、小学校高学年、中学校と進むと、その基礎の上に、川は家庭の排水で汚れることや、川をきれいにしないと魚が住めなくなるなど、生物と自然との関連がわかってくる。そうすると、高校の段階では地球環境問題について突っ込んでいけます。

しかし、今はまだそういうテーマについて国語や理科、社会などでバラバラに教えているんですね。これを環境問題として系統だてて教え、実践活動につなげていくことができないかなというところで、今指導書を準備しているところです。

山口さんは子供さんが二人いらっしゃるようですが、日常の子供さんの行動や反応はいかがですか。